医療タイムス

週刊医療界レポート

2014.7/21 No.2167

特集

医療と費用

予防・医療に関わる費用に関する意識調査

タイムスインタビュー

改定前の今が介護事業参入のチャンス
基盤を固め2025年を迎える

株式会社さくらケア　代表取締役
全国訪問介護協議会　会長

荒井信雄氏

タイムスレポート

川崎南部摂食嚥下・栄養研究会　市民公開フォーラム

2025年問題を見据えて
市民に向けて口腔管理の重要性を啓発

Top News

多機能・高機能な訪問看護STへの評価を要望　日看協

介護報酬請求省令の改正を要望　保団連

川崎南部摂食嚥下・栄養研究会　市民公開フォーラム

2025年問題を見据えて 市民に向けて口腔管理の重要性を啓発

各職種によるディスカッションも行われた

会場となった川崎市産業振興会館

神奈川県川崎市南部地区の医療・介護関係者が、摂食・嚥下・リハビリテーションの知識向上、情報交換のため組織した「川崎南部摂食嚥下・栄養研究会」は５日、「2025年問題を見据えて～地域ぐるみで支える高齢者の食と暮らし～」をテーマに、市民公開フォーラム（事務局：川崎幸病院地域医療連携室）を開催した。会場には、市民も含め約150人が集まり、熱心に聞き入った。

病院完結型医療から、地域完結型医療へ

神奈川摂食・嚥下リハビリテーション研究会川崎地区代表世話人の鈴木英哲氏

開会あいさつに立った神奈川摂食・嚥下リハビリテーション研究会川崎地区代表世話人の鈴木英哲氏は、政府が昨夏発表した社会保障制度改革国民会議最終報告を引用し、「日本はこれから、従来の『病院完結型医療』から、地域包括ケアシステムに沿った『地域完結型医療』へと変化を遂げる」と説明し、「地域で治し、支える医療に変化していく中で口腔管理はその鍵を握るだろう」と指摘した。鈴木氏は、「要介護高齢者には、最後まで口から食べる機能を維持し、周囲もその機能を維持できるよう支えることが求められる。住み慣れた地域で最後まで安心して暮らすためにも、口から食べる機能を支える仕組みを構築することが重要だ。今日のフォーラムをきっかけに、口腔機能維持の知識を持ってほしい」と呼びかけた。

続いて、『誤嚥ってなんだろう』をテーマに、川崎市立川崎病院耳鼻咽喉科部長の相馬啓子氏が講演した。相馬氏は、嚥下障害を簡単に発見できる反復唾液嚥下テストを実演。さらに、病院で行われる嚥下障害検査である①ビデオ内視鏡検査：鼻腔よりファイバースコープを咽頭腔に挿入し、咽頭や喉頭の観察を行い、さらに実際に食物を嚥下して映像を記録する②ビデオ嚥下造影：造影性のあるもの（バリウムなど）を嚥下し、X線で観察しビデオに記録する―の方法を、動画を用いて紹介した。相馬氏は会場に向けて、「食べる意欲があれば、口から食べられる可能性は残されている。しかし高齢者は特に肺炎、窒息などの症状に細心の注意が必要になってくる」と注意を促した。

なぜ高齢者が誤嚥性肺炎を起こすか チーム医療で支える口腔管理

日々、訪問医療に取り組む川崎市幸区医師会会長の中岡康氏は、『高齢者と誤嚥性肺炎』をテーマに講演し、高齢者の肺炎が起こるメカニズム、影響などを紹介した。高齢者が誤嚥性肺炎を起こしやすい理由として、▽体力の低下により、気管に食物を誤嚥しても咳が弱くて外に喀出できない▽特に寝たきりの人は嚥下能力が低下し、咳の反射も低下、食物、唾液、胃液などを誤嚥する▽何度も誤嚥を繰り返すうちに誤嚥に対する反射も徐々に落ちていく―などを挙げた。中岡氏は、「最後まで口から食べる生活を送り、嚥下・咀嚼能力が、いつまでも保たれることが健康長寿の鍵を握る。こうしたフォーラムや研修会の開催の機会を増やし、市民自らが予防できる方法を知ってもらい、誤嚥性肺炎になる人を減らしていきたい」と述べた。

川崎市立川崎病院耳鼻咽喉科部長の相馬啓子氏

口腔管理の在り方がディスカッションされた

会場には約150人の聴衆が集まった

川崎市幸区医師会会長の中岡康氏

歯科衛生士として訪問医療に携わる愛仁歯科医院・口腔機能支援センターさいわいセンター長の本間久恵氏は『多職種で支える誤嚥性肺炎予防』をテーマに講演した。地域医療連携における歯科衛生士の役割を、①口腔機能評価・助言②摂食機能療法③口腔ケア―と説明した上で、「重要なのは、これらの役割を歯科衛生士が訪問できない日にも、毎日ケアしているヘルパーに引き継ぎ、継続すること」と強調。医師・看護師、薬剤師、ヘルパー、ケアマネジャーがそれぞれの役割を果たしながら、「高齢者の地域で食べ、暮らすことを支えることが大切だ」と指摘。歯科衛生士から、他職種にお願いする口腔管理の内容についても、「歯磨きの際、歯ぐきをやわらかくマッサージや、唇の裏側をガーゼでふくことを行ってほしい」などと具体的に紹介した。本間氏は、「他職種の方に口腔管理を頼むように、逆に他職種の方から例えば室温管理などお願いされることもある。チーム医療は持ちつ持たれつ。不安定な病状の高齢者を多くの地域の支え手が連携し、支えていくことが重要ではないか」と話した。

口腔管理、誤嚥性肺炎予防… 専門家が広げる啓発活動

講演後には、同研究会所属の医師、看護師、栄養士、歯科衛生士、ケアマネジャーなどによるディスカッションを行った。在宅医療中心のクリニックを運営する、メディ在宅クリニック院長の高橋保正氏は、外科医として手術後の患者の予後に関わってきた経験から「術後回復にガムを使った咀嚼訓練を行い、腸を動かし、食欲を取り戻す経過の大切さを実感してきた。現在、在宅医療で進行がん、末期がん患者も診ているが、いかに誤嚥性肺炎を防ぎながら、最期まで口で食べたいものを食べてもらえるかには苦心している」と発言した。

また、夢見ヶ崎居宅介護支援センターでケアマネジャーを務める山本千恵子氏は、「誤嚥性肺炎を予防するためにできる口腔管理は、われわれ医療・介護に携わる専門職だけで取り組めるものではない。家族と一緒に取り組んでいく必要がある」と指摘。ケアマネジャーの立場から、「口腔管理への意識が薄い家族も、歯科衛生士をはじめ、ヘルパー、看護師が連携し、一所懸命口腔管理を続けている様子を見れば、自ずとその重要性に気がつき、自然と意識してくれるようになるはずだ」と期待を込めた。

愛仁歯科医院／口腔機能支援センターさいわいセンター長の本間久恵氏

座長を務めた中岡氏は、川崎南部摂食嚥下・栄養研究会のミッションについて言及し、「摂食・嚥下障害について勉強会を経た医療・介護関係者が、それぞれの地域で市民向けに講習会などを積み重ね、口腔管理、誤嚥性肺炎予防が、家族でもできるのだという理解が広がっていくことだ」と述べると、会場に集まった市民から大きな拍手が起きた。この日のフォーラムが摂食・嚥下障害、ならびに口腔管理への理解促進が進んだことを感じさせた瞬間だった。